

1. 記紀神話を歴史として読む

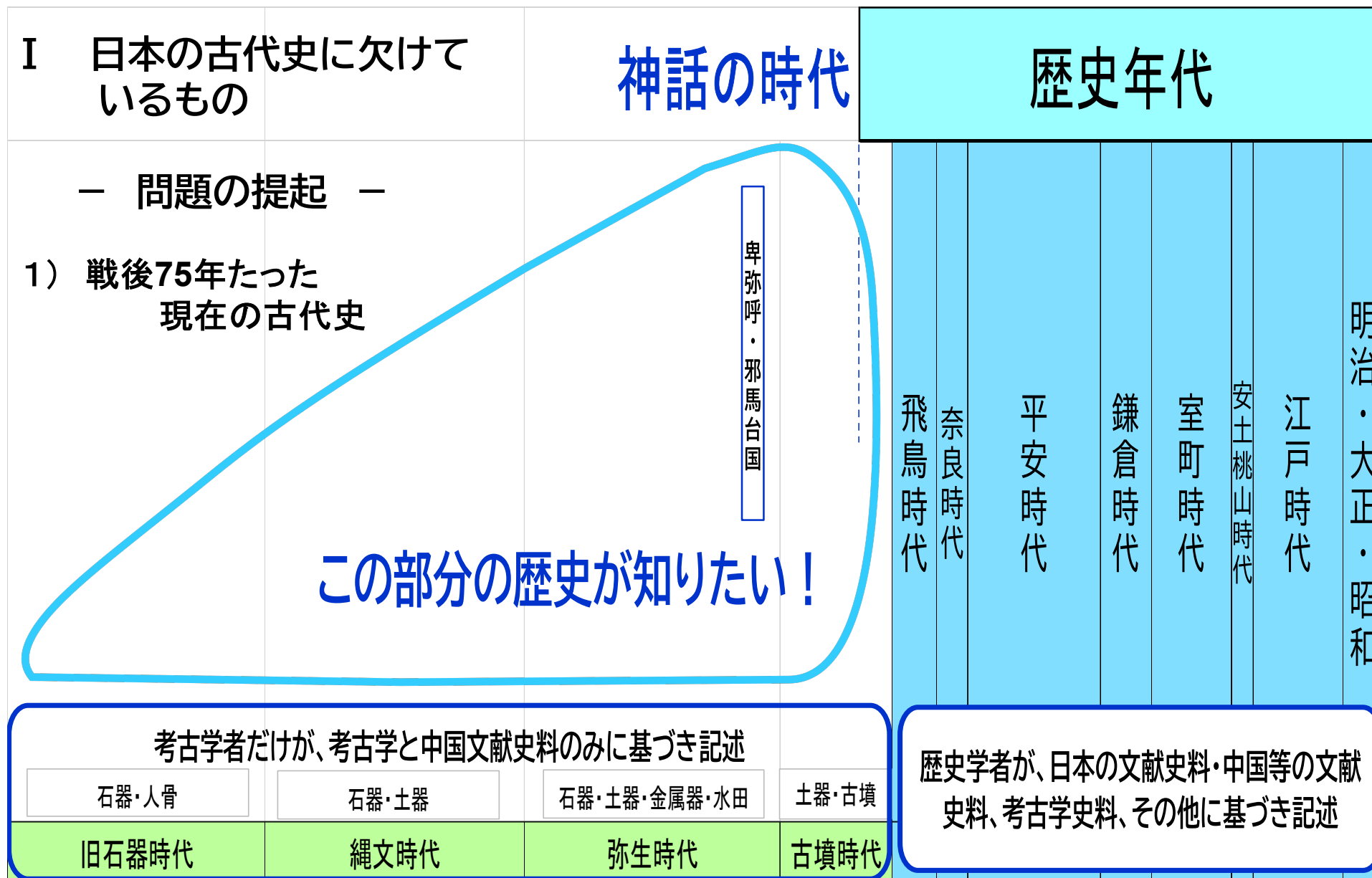
日本古代史ネットワーク 設立記念・講演会
“古代史の新しい解明”を目指す

2020年11月21日(土)
会場: 東京都品川区 きゅりあん

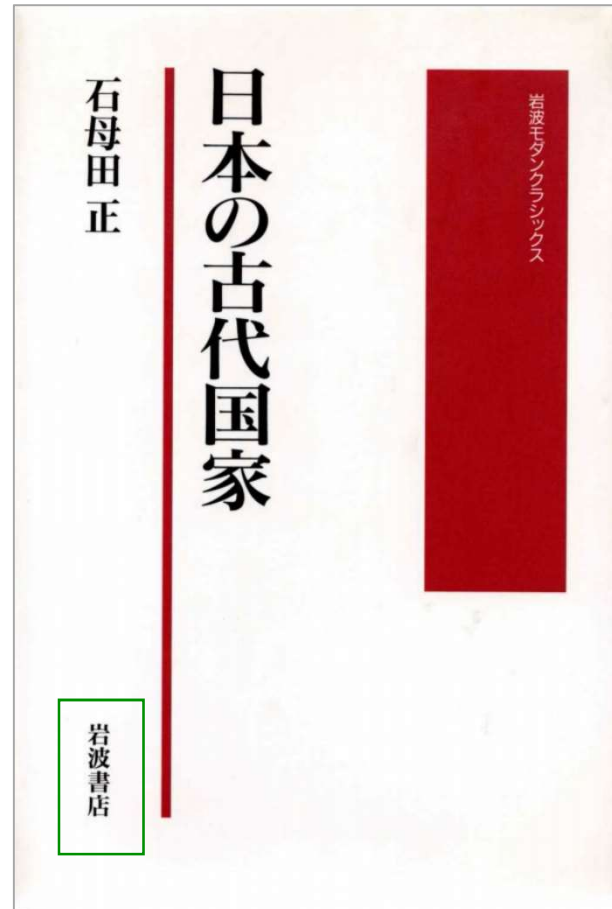
丸地 三郎

目次

- I. 日本の古代史に欠けているもの — 問題の提起 —
 - 1) 戦後75年たった現在の古代史
 - 2) 歴史としての読む主な神話 ① ② ③ ④
- II. 神話を歴史として読むと云うこと
 - 1) 文学として読むこととの違い
 - 2) 時間軸の整理
 - ✓ 神話の事件と登場人物
- III. 事件の順番が判明すると
 - ✓ 東征の物語は、会議から始まる。
- IV. 神武東征
 - ① 大和攻略開始
 - ✓ 考古資料が記紀の神話を裏付ける
 - ✓ 大阪の古地図
 - ✓ 第二次高地性集落
 - ② 熊野灘の 遭難
 - ✓ 考古学上の疑問が記紀神話から解消
 - ③ 大和朝廷成立時の神武一行
 - ④ 神武達の最初の政策実行 政略結婚
- V. 手研耳命(タギシミミノミコト)の乱と後継天皇
 - ✓ 九州から来た天孫族の一族の抹殺
 - ✓ 出雲族の事代主とその一族の勢力
- VI. まとめと展望



権威ある古代史の専門書



- 大化の改新以前は、魏志倭人伝のみ

一九七〇年十一月

石母田 正

目 次

はしがき

第一章 国家成立史における国際的契機 一

第一節 交通の問題 戦争と内乱の周期 二

第二節 権力集中の諸類型 推古朝 三

第三節 二つの方式 大化改新 四

第四節 第二の周期 天平期 五

第二章 大化改新の史的意義 六

第一節 改新の課題 史料批判の問題 七

第二節 人民の地域的編成 王民制から公民制へ 八

第三節 改新と東国首長層 九

吉川弘文館の日本古代の歴史1

- 旧石器・縄文時代・弥生時代と記述が続くが、全て考古資料に基づく記述のみ。
- 唯一の例外が「魏志倭人伝」による「女王卑弥呼と邪馬台国」
- 倭の五王の時代から、文献による記述が始まる。



目次

日本列島の文化のあけぼの——プロローグ..... 1

日本国・日本人とは何か／五つの時代区分／各時代の時期細分／北海道・沖縄の時代区分

一 旧石器時代の日本列島..... 8

- 1 人はいつ日本列島に姿をあらわしたのか 8
赤土の中の人類文化／旧石器文化はどこまでさかのぼるか
- 2 日本列島の形成と旧石器文化——自然環境と動植物相 12
氷河時代／日本にもソウがいた
- 3 火山灰層と旧石器文化 15
石器と作り方／火山灰層と旧石器の変遷／旧石器文化の地域性／旧石器時代の顔つき・体つき
- 4 旧石器人の住居と暮らし 22
住居と集落／環状ブロック群とは何か／大型獣を捕える——落とし穴／衣服・装身・墓・折り

二 縄文人の生活と社会——高度な狩猟・採集文化..... 29

- 1 道具と技術——生活の革新 29
温暖化と新文化の登場／縄文文化の時期区分／縄文文化の東西
- 2 縄文土器の発明——新文化の象徴 35
土器の発明／縄文土器のはじまり／本格的な縄文土器の成立／土器の多様化——後・晩期／縄文土器の形と用途、美しさ／磨製石斧の発明／槍から弓矢へ——狩猟の革新——高度な漆の技術
- 3 住まいとムラ、墓地 48
住まい／さまざまな生活跡／環状集落——広場を中心としたムラ——墓と墓地／環状列石と周堤墓
- 4 縄文人の食生活——山の幸・海の幸 59
木の実が主食／シカ・イノシシ狩り／暮らしを知る宝庫——貝塚——豊かな魚類／縄文人の一年／農耕はあったか
- 5 縄文社会のしくみ——呪術が支配した社会 72
タフと呪い／土偶と石棒／祭場の姿／縄文人の体つきと技術の風習／子供の成長への祈り
- 6 厚葬のはじまりと王墓の成立 138
新しい墓のはじまり／前・中期の墳丘墓／倭の奴国と金印／クニの成立と王墓／政治的まとまりの形成／瀬戸内東部の円形墳丘墓

四 倭国と前方後円墳の登場..... 152

- 1 女王卑弥呼と邪馬台国 152
卑弥呼の登場／邪馬台国の社会／卑弥呼の外交／邪馬台国はどこにあったのか
- 2 弥生墳丘墓から前方後円墳へ 158
前方後円墳の源流／纏向古墳群／巨大集落・纏向遺跡／卑弥呼の墓／箸墓古墳の年代と被葬者／邪馬台国連合から倭国連合へ／前方後円墳と倭国連合の成立
- 3 倭国初期の王陵 170
初期の王陵／行燈山古墳と渋谷山古墳
- 4 共通する葬送祭式の拡大 174
出現期古墳の特徴／古代国家の成立

五 倭の五王の時代..... 180

2) 歴史としての読む主な神話 ①

物語を思い起こしてもらうために、
大和朝廷成立期までの主な出来事を記す。

国生み・人生みの神話の後、以下が記される。

1. 天照大神(アマテラスオオカミ)と須佐之男命(スサノオノミコト)の対立

- ①天照大神(アマテラスオオカミ)が武装して、須佐之男命(スサノオノミコト)の到来を待つ
- ②天照大神と須佐之男命の誓約
- ③須佐之男命の狼藉
- ④天の岩戸事件

2. 須佐之男命の追放

- ①八岐大蛇(ヤマタノオロチ)退治と出雲の国造り

3. 大国主命の神話

- ①八上比売(ヤガミヒメ)への求婚の旅 ・ 因幡(イナバ)の白兔神話
- ②八十神(ヤソガミ)の迫害
- ③根の国訪問(須勢理毘売命(スセリビメノミコト)との婚姻)
- ④奴奈川比売(ヌナカワヒメ)へ求婚
- ⑤須勢理毘売命(スセリビメノミコト)の嫉妬
- ⑥少名毘古那神(スクナヒコナノミコト)と国造り

2) 歴史としての読む主な神話 ②

4. 葦原中国(アシハラノナカツクニ)の平定 (出雲の国譲り)

- ①天菩比神(アメノホヒノミコト)の派遣
- ②天若日子(アメノワカヒコ)の派遣
- ③建御雷神(タケミカヅチ)の派遣
 - ・ 事代主神(コトシロヌシノカミ)の服従
 - ・ 建御名方神(タケミナカタ)の不服従と服従
- ④大国主命(オオクニヌシノミコト)の国譲り

5. 天孫降臨(テンソンコウリン)

- ①天忍穗耳尊(アマノオシホミミノミコト) 降臨せず
- ②子の瓊瓊杵尊(ニニギノミコト) 降臨
 - ・ 猿田毘古神(サルタヒコノカミ)・猿女の君(サルメノキミ)・従者達
 - ・ 木花之佐久夜毘売(コノハナノサクヤビメ)
- ③火遠理命(ホオリノミコト)
 - ・ 海幸彦・山幸彦
 - ・ 海神の宮訪問
 - ・ 火照命(ホデリノミコト)の服従
 - ・ 鵜葺草葺不合命(ウガヤフキアエズノミコト)誕生

2) 歴史としての読む主な神話 ③

6. 神武東征

- ① 五瀬命(イツセノミコト)と3兄弟で東征の会議
- ② 筑紫の岡田宮・阿岐(アキ)国の多祁理宮(タケリノミヤ)・吉備(キビ)国の高島宮(タカシマノミヤ)
- ③ 浪速(なにわ)国の白肩津(シラカタノツ)
 - ・ 長兄の五瀬命が負傷、退却し、
 - 東から攻めることを宣言
- ④ 紀国の男之水門(オノミナト) (五瀬命死亡)
- ⑤ 熊野で暴風雨に遭遇 (残る2兄 海難死亡)
 - ・ 神武とその配下が熊野の荒坂津へ丹敷戸畔(ニシキトベ)を誅す
 - ・ 高倉下(タカクラジ)が剣発見、大和へ進軍
 - ・ 菟田(ウダ)・国見丘・鳥見(トミ)など転戦
- ⑤ 大和入り
 - ・ 天津瑞(アマツシルシ)(天の羽羽矢など)を示されたことから、饒速日命(ニギハヤヒノミコト)が恭順し、戦闘終結
 - ・ 大和入りし、畝火(ウネビ)の白橿原宮(カシハラノミヤ)で即位
 - ・ 事代主の娘(伊須気余理比売(イスケヨリヒメ))を皇后に選定

2) 歴史としての読む主な神話 ④

7. 手研耳命(タギシミミ)の乱と後継天皇

- ① 手研耳命の乱 (神武天皇の崩御後、九州から同行した子が権力奪取)
- ② 皇后(伊須気余理比売)の子:神沼河耳命(カムヌナカワミミノミコト)が、手研耳命を殺害、
- ③ 綏靖(スイセイ)天皇として即位
 - ✓ 綏靖天皇、事代主の娘(五十鈴依媛命(イスズヨリヒメノミコト))を皇后とする
- ④ 子の安寧(アンネイ)天皇が即位
 - ✓ 安寧天皇、事代主の孫娘を皇后とする

- ✓ 以上 の話は、教科書にも歴史専門書にも出てこない。
 - ・ 実際にあった物語では無いのか？
 - ・ 事実と認定できないから、排除しているのか？
 - ✓ 事実と認定する努力をしてきたのか？
 - 事実と認定する努力・行動をとってこなかったと考える。
- 事実と認定する努力を払うと、どうなるのか、やってみよう！

II 神話を歴史として読むと云うこと

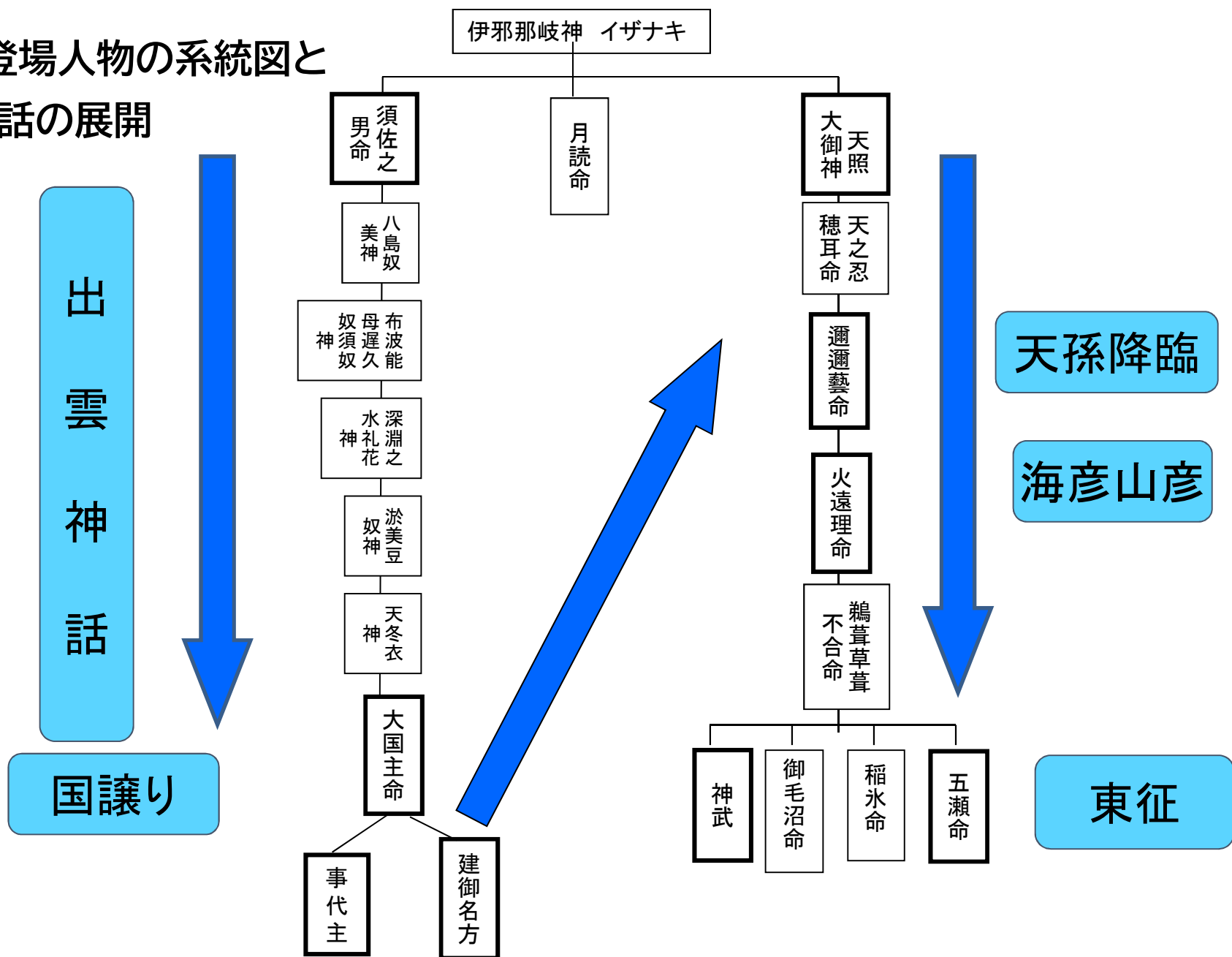
1) 文学として読むこととの違い

- ✓ 文学は、
 - ・ 言葉と美の世界に重きを置き、
- ✓ 歴史は、
 - ・ 時間と空間と事件・出来事の内容に重きを置く。
- ・ 歴史として、神話を読むときは、
 - ・ 文学者の解釈を頼りとするが、
 - ・ 別の視点をもって、
 - ・ 時間・空間、内容を整理しながら読み、理解すること
- ・ 文献が正しく伝えているのか、検証する。
 - ・ 検証に当たっては、考古資料、古地図・地理学、年代測定法、DNA検証など他の学問分野の成果を利用する。
 - ・ 他分野の支援を受ける時も、その内容が正しいものか、歴史研究する人が、検証する必要がある。
 - ・ 科学者の云うことを、検証せずに、利用することは、誤りの原因。

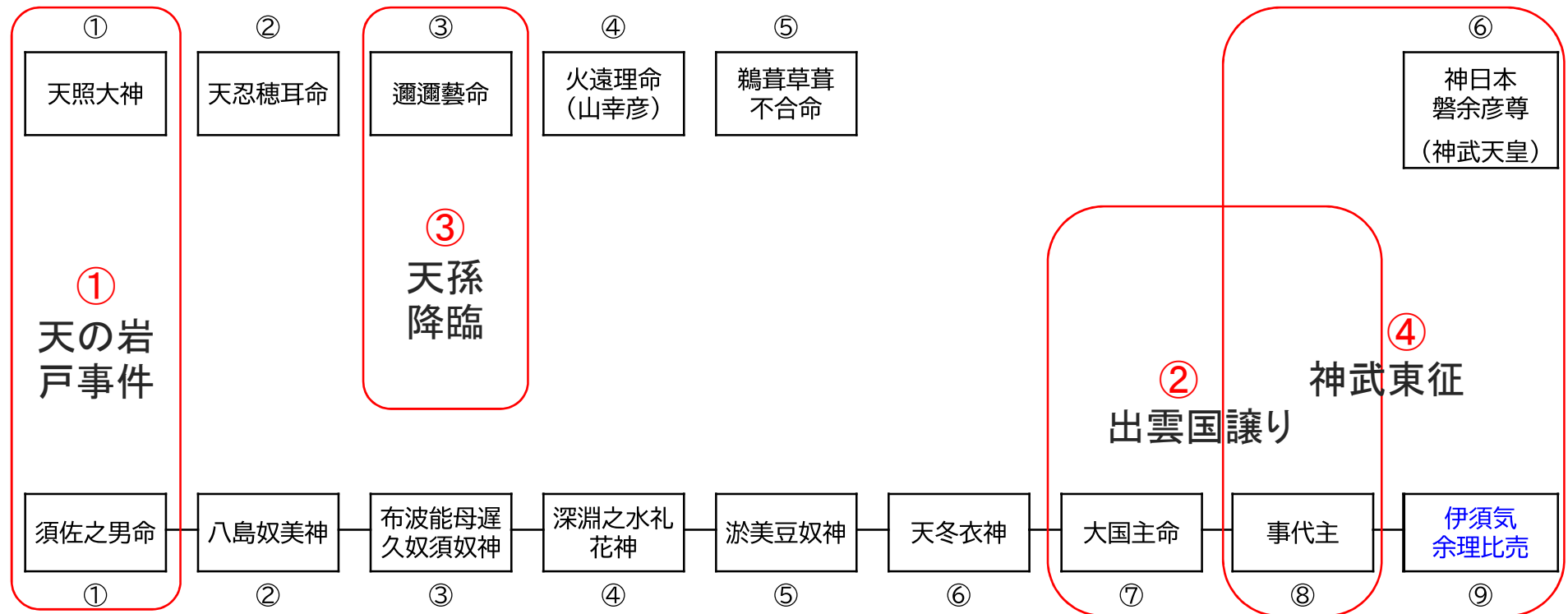
2) 時間軸の整理

- ・ リストアップした神話の事件をたどってゆくと、
 - ・ 神話の事件の順番と登場人物の辻褄が合わない気がする。
- － そこで、時間軸を揃えて整理して行きたい。
 - ・ 残念ながら、各々の事件の年代は分からない。
 - ・ 日本書紀・古事記の年代については、正確ではないことが、既に、論議されている。
- ・ 登場人物とその親子・子孫の関係が、一つの糸口になる。

• 登場人物の系統図と
話の展開



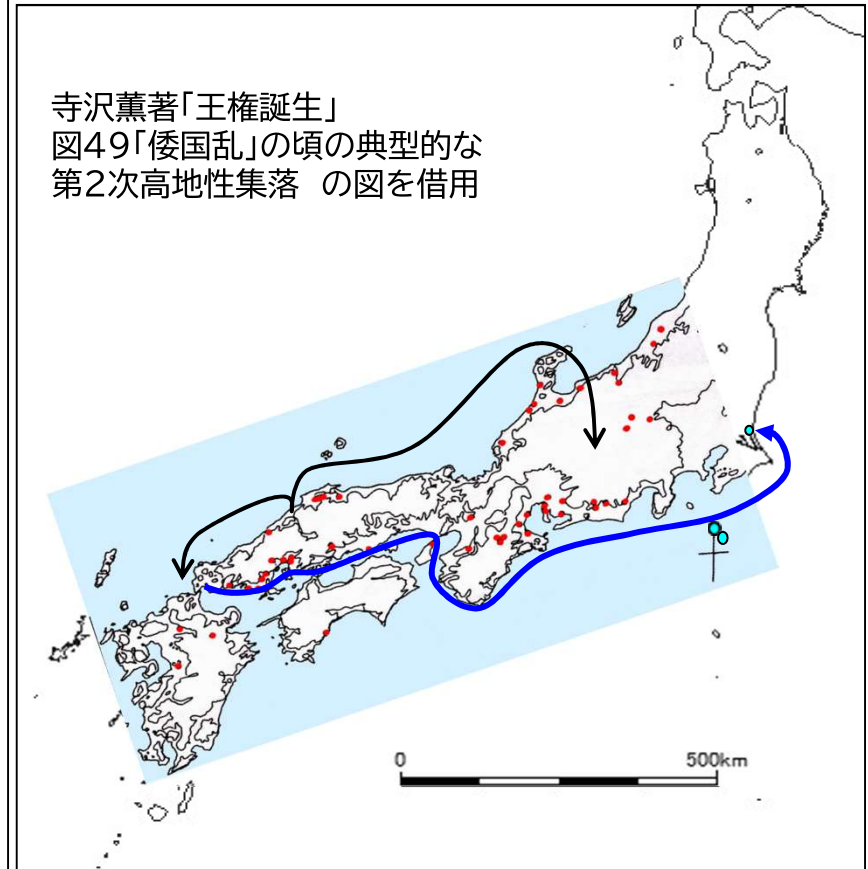
神話の事件と登場人物



III 事件の順番が判明すると

- 武甕槌神・経津主神は、高天原に呼び出され命を受ける。
 - 出雲へ行き、国譲りの談判を行う。
 - 建御名方を追い北陸・糸魚川から長野県・諏訪まで行き、降伏させ、
 - 出雲に戻り、国譲りで実現し
 - その結果を高天原にもどり報告。
 - 出雲の久那斗神を道案内人として、領土を受け取るために、人員を率いて、東端の鹿島・香取まで、行き住み着いたものと推測する。
- 神武東征の開始の描写を見てみよう。東征の物語は、会議から始まる。
 - ✓ 古事記 : 「いづこに坐さば、平けく天の下の政を聞こしめさむ。なお東に行かむ。」
 - ✓ 日本書記 : 『東に美き地有り。青山四周(ヨモニメグレリ)。(中略) 彼の地は、必ず以て大業(アマツヒツギ)を恢弘(ヒラキノ)べて、天下に光宅(ミチオ)るに足りぬべし。蓋し六合(クニ)の中心か。』
- 会議の目的は、遷都先の選定 → 大和
- 順序が判明すると、神武東征の会議目的が、納得できるものになる。

寺沢薫著「王権誕生」
図49「倭国乱」の頃の典型的な
第2次高地性集落 の図を借用



IV 神武東征

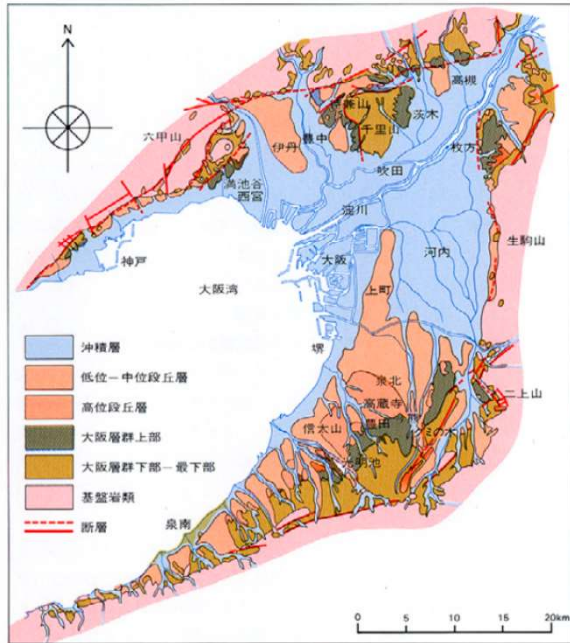
① 大和攻略開始

- 九州を出発し、筑紫の岡田宮・阿岐国の多祁理宮・吉備国の高島宮を經由し、戦力を整え、いよいよ、大和を目指し、大阪湾から攻略を開始する。
- 古事記は、簡潔に記述され、日本書紀では詳細に記述されている。特に目立った矛盾はない。
日本書紀の記述に従い、経緯を示す。
 - ・ 浪速の渡を経て、草香邑(クサカムラ)の白肩津(シラカタノツ)に至る。 4月
 - ・ 徒歩で龍田(タツタ)へ向かう。難路で断念。
 - ・ 戻り、生駒山を越えようとした。
 - ・ 孔舎衛(クサカエ)の坂にて長脛彦軍と戦う。
 - ・ 流れ矢が五瀬命の肘に当たる。「皇師(ミイクサ) 進み戦ふこと能わず。」
 - ・ 「日に向かうのは間違い、日を背にして戦う」と神武軍撤退 東側から攻めるとの意味か。
 - ・ 大阪湾を退き、南下する。
 - ・ 五瀬命死亡、紀伊国の竈山(カマヤマ)に葬る。 5月
 - ・ 名草邑に至る。名草戸畔(ナクサトベ)を殺す。 6月

津田左右吉氏が疑問を示した神武東征の難波の白肩津や楯津が、復元された大阪湾の地図上に、上陸作戦の好適地として存在することが判明した。

疑問の提示が、逆に、実在の証明になった。
歴史上の新しい事実が発見された時点で、歴史観を再検討すべきだったと、私は考える。





大阪の古地図

- 大阪は左の地質図の通り、固い地層と沖積域に分かれる。
 - 沖積層は、当時は、図のように、海と河内湖の水域になっていた。
 - 弥生時代の遺跡も、当時の陸地に有った。
- 津田左右吉の古代史批判で、白肩津で上陸したと云うのは、虚偽と決め付けたが、古地図が復活すると、海に繋がる水面が存在し、その岸に地名が存在した。真実の証拠となった。

C. 河内湖の時代〈約3000-2000年前・縄文時代晩期-弥生時代前半〉の古地理図



D. 河内湖 I の時代〈約1800-1600年前・弥生時代後期-古墳時代前期〉の古地理図



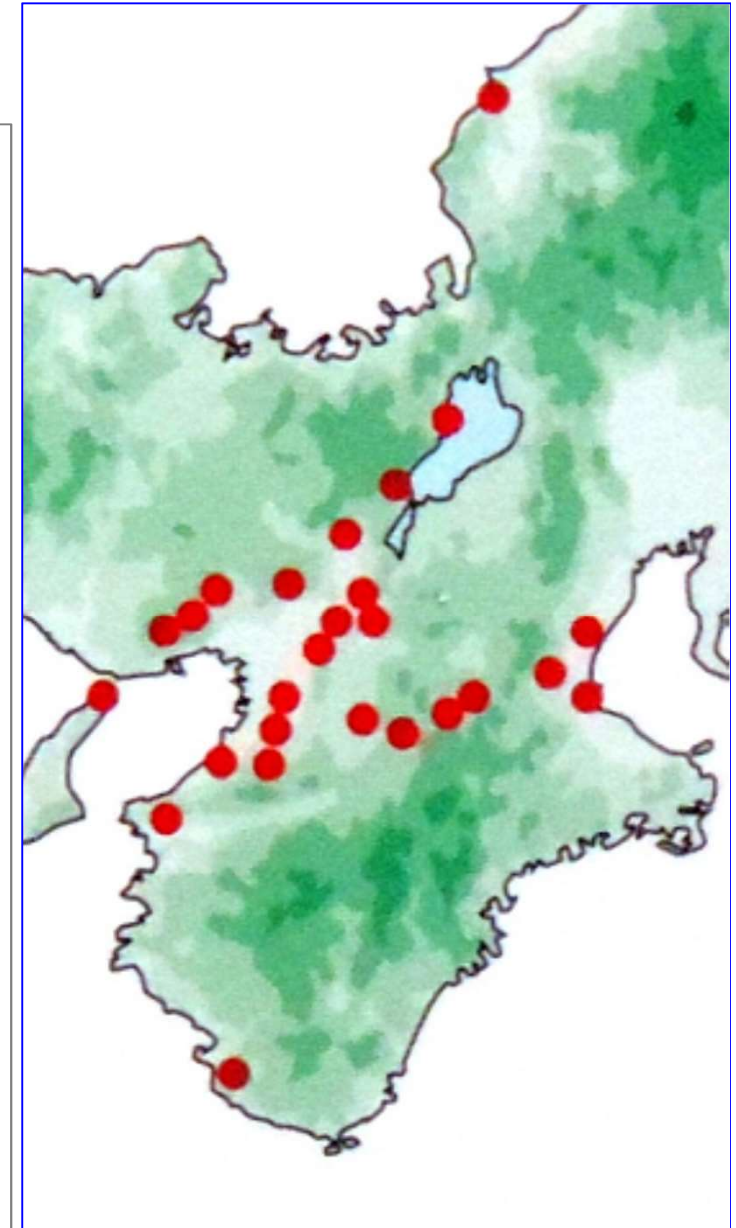
資料・第四紀の日本列島——4

大阪層群と大阪平野

市原実＝大阪市立大学理学部助教授

神武東征の経路と第二次高地性集落

- 戦争に関わる遺跡である高地性集落を見る。
 - 高地性集落は、交通の要所に見張り台を兼ねて作られた場合は、恒久的に、長期間使われたケースや、極めて短期間だけ存続し、特定の戦争・戦闘のために、見張りや戦うための山城として作られたケース、やや長期間に渡り存続し、敵の襲撃に備えたケースなどがある。
 - 若林邦彦氏の『「倭国乱」と高地性集落論・観音寺山遺跡』に掲載されたを見ると
 - 白方津から龍田のルートに沿って、高地性集落が並んでいることが判る。
 - 龍田から大和川を遡り奈良盆地に至る付近には、
 - 饒速日命と、随行した物部氏一族の拠点地域が並んでおり、
 - 庄内式土器・布留(フル)式土器の産地ともなっている。
 - 饒速日命側の要所であって、守備を固めていた処と推定される。
 - 従って、五瀬命・神武軍が徒歩で進もうとして龍田へ至るルートは、大和を守備する側の軍備や設備が整った地帯。
- 日本書紀に記すように、単に「其の路狭く峻しくして、人並み行くこと得ず」では無く、
- ここでも激戦が行われ、五瀬命・神武軍が退却を余儀なくされた結果を、日本書紀ではさらりと「路が狭く、峻しかった」と記したものと、考える。
- 考古資料の戦争遺跡を丹念に追うと、記紀神話に記された地名や事件と一致することが多くみられる。この戦争遺跡が理解できると、記紀神話がリアルに、現実性をもって解釈できる。



弥生時代後期から古墳時代初頭の高地性集落
「倭国乱」と高地性集落論・観音寺山遺跡
若林邦彦 著 より

② 熊野灘の遭難

山岳・丘陵文の緑の彩色
高地性集落の赤点
青の行動線と赤の点線
丸地が追記したもの

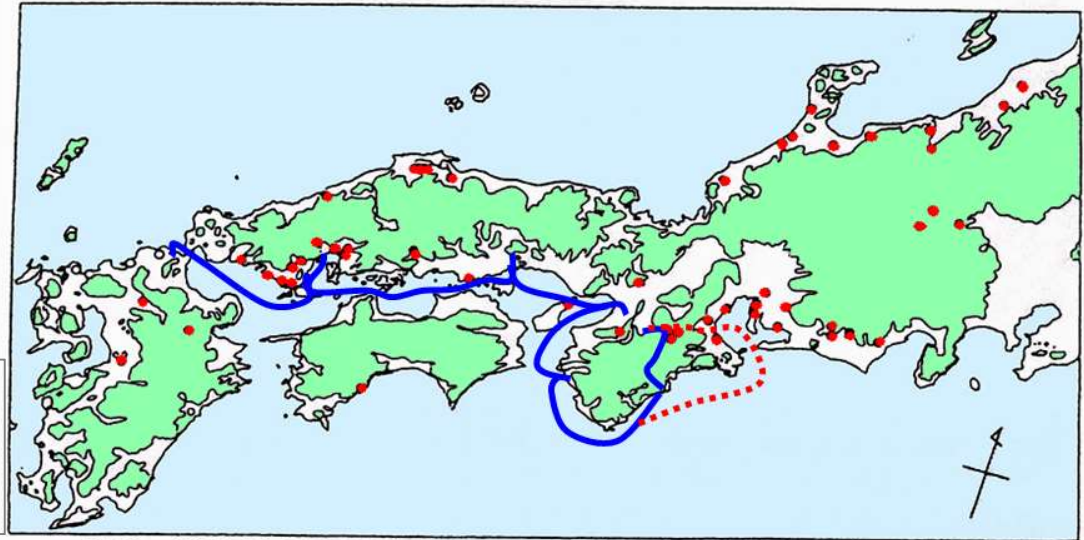


図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落(寺沢薫『王権誕生』)

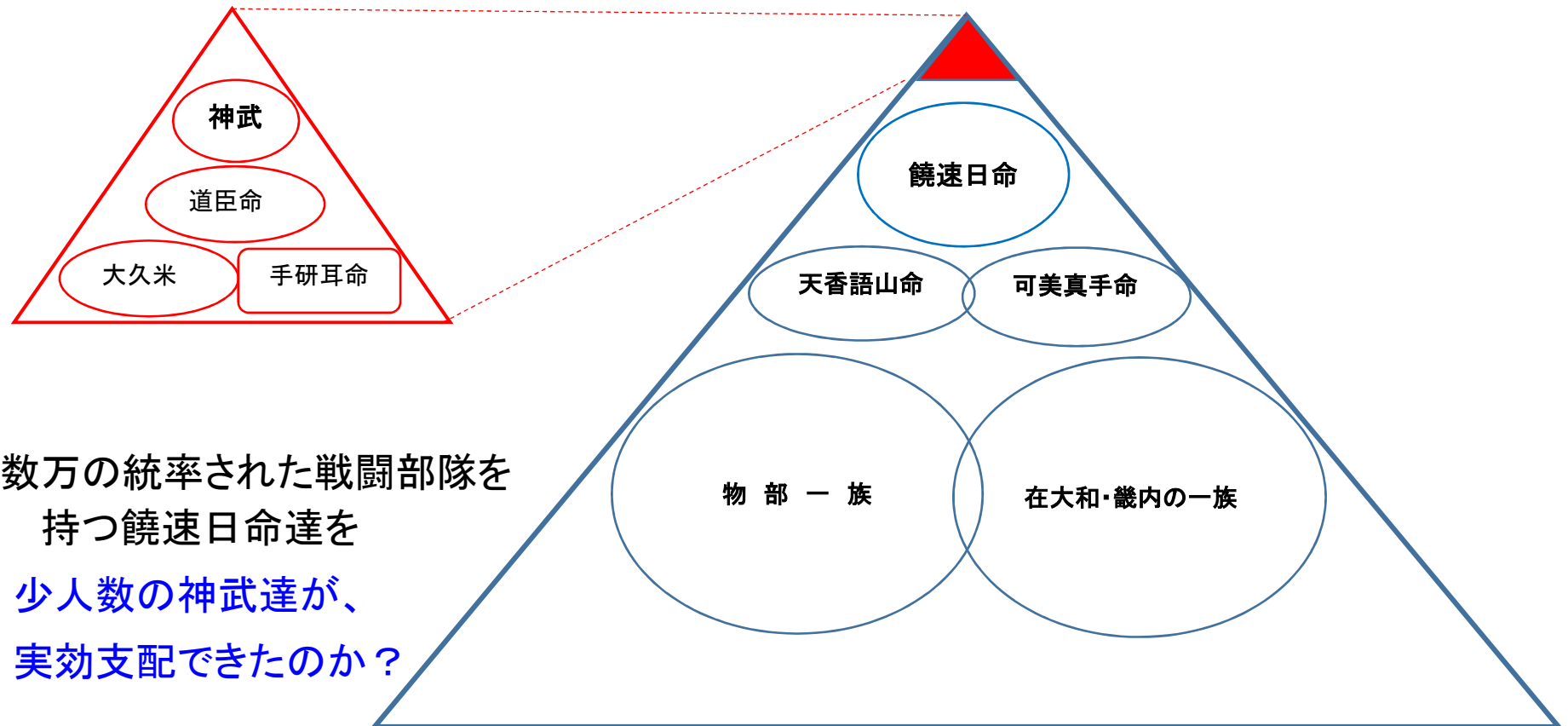
- 指揮官の五瀬命を失った神武軍は、その後、海路を順当に航行し、熊野に至り、天磐盾(アメノイワタテ)(現在も観光地であるゴトビキ岩)を登るとの記述がある。
- ・ 日本書紀には、「海の中にして卒(にわか)に暴風に遭ひぬ。」とあり、神武の兄二人が遭難死する場面が記述。
- ・ 古事記では、この遭難の記述は無い。神武の二人の兄は、その誕生の記事に、「波の穂を踏みて常世國に渡りまし」「妣国(母の国)である海原へ入り坐(マ)した」とだけ記し、熊野灘の惨劇の記述を回避したと考えられる。
 - ・ 神武の兄二人が遭難したことは、艦隊の大多数が遭難したと考える。
 - ・ 上陸する時は、重い刀や武器を捨て、身一つで高波の中、岩場や浜に泳ぎつuitと想像する。
 - 九州から運んできた貴重品・武器・武具などは全て、海中へ沈み、失ったと推定。
- ・ 考古学者は、神武東征に疑問を投げかける人も多い。その理由として、九州から畿内に、大挙して人が移動したならば、大量の九州産土器などが発見されるはずだが、出土しない。鏡・武器なども、出土しない。技術も移転したようには見えない。だから、神武東征は無かったのだ。
 - 熊野遭難の記述を読めば、神武軍と一緒に到着するはずだった土器・鏡・武器、さらに、技術を持った人々も全て、熊野灘に沈んでしまったため、失われたことが判る。
 - 考古学者の指摘は、鋭いものが有るが、文献と照らし合わせると、その答えが明らかになる場合がある。熊野灘の遭難はその例と云える。

③ 大和朝廷成立時の神武一行

- 大和入りした時、神武一行の中で、九州から随同行した主だった人々は？
 - 道臣命(大伴の祖)・大久米・手研耳命
 - 固有名詞の出てくる人はこの3人。
 - 久米歌の場面から、久米の人々が複数いたことが推定される。
 - 椎根津彦(しいねつひこ)=珍彦(うづひこ)は、途中随行者
 - 高倉下・八咫烏などは、熊野より随同行した人々
 - 九州から随同行した人々の持ち物
 - 熊野灘の遭難で、装備してきた甲冑・武器(重い金属製品)などは、全て海中に没し、携行できたものは、身の回りの品物だけと推定される。
 - 天孫族の印である天羽々矢一隻と歩鞞は、かろうじて帯同して持ち出したものか？
 - 大和侵攻のため携行した武器は、丹敷戸畔から調達したものと推定される。
- 大和入りした時の神武一行
 - 九州から随同行した人員は、上記3人+久米一族など。及び、吉備などから参加した若干の人員。
 - 熊野より随同行した人々、及び、その後、傘下に入った宇陀の弟猾など。千人程度か。
 - 饒速日命(ニギハヤヒ)傘下の大和防衛軍。
 - 九州から饒速日命に随同行した物部一族
 - 畿内在住の弥生渡来系の人々・出雲の支配下に居た人々
 - 饒速日命の支配下に入って居た先住民(ツチグモ・縄文人)
- 大和朝廷成立時の状況
 - 九州から神武に随行してきた人員は、少人数で、大和朝廷を成立させた。
 - 大和朝廷の大多数は、饒速日命一族と出雲一族で構成されていた。

大和に入った神武一行と饒速日命

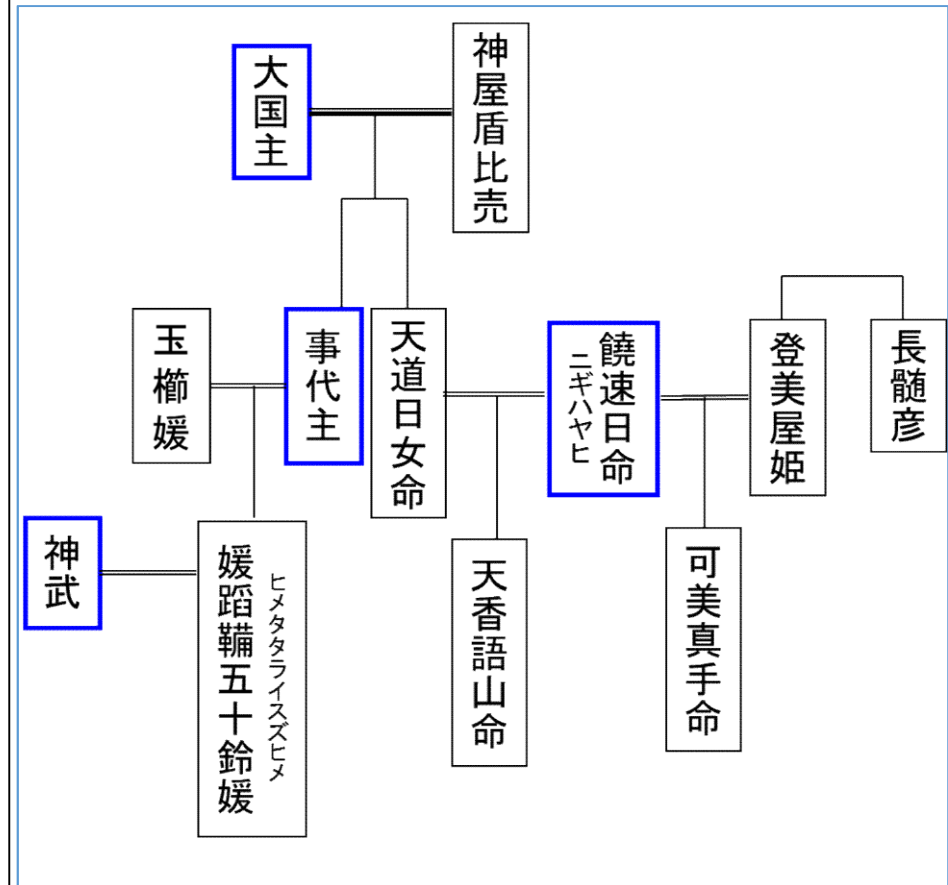
- 神武達は、熊野から随行したメンバーは、数十名と推定。
 - 海難事故で生き残り、随行できた九州からの人員はもっと少ない。
- 一方、饒速日命達は、
 - 九州から饒速日命に随行した物部一族が多数の兵士を支配下に置く。
 - 長髓彦の傘下にあった兵士多数を、可美真手命(長髓彦の妹との子)の下に置く。



- 数万の統率された戦闘部隊を持つ饒速日命達を
 少人数の神武達が、
 実効支配できたのか？

神武達の最初の政策実行

- 政略結婚
 - 饒速日命は、大国主命の娘・天道日女命と結婚していた。
 - その妻の兄が事代主。
 - 大和・畿内を支配してきた事代主は、この時代にも大きな影響力を持っていたものと推測される。
 - 事代主は、三輪山・大神神社に祀られる。
 - 大和の守護神。別名、大物主。
 - その娘に適齢期の媛蹈鞬五十鈴媛がいた。
- 九州に正妻を残してきたが、神武は、**政略結婚に踏み切った**。
 - 大和入りした年
 - 神武、正后妃として、事代主の娘を迎える。(日本書紀)
- 大和を譲った饒速日命とその部下達にとって、神武は、敵対し難い存在となった。
 - 敵対すれば、ボスである饒速日命と事代主に仇することになってしまった。
 - この政略結婚は、神武側にとって、きわめて有効な政策であったと云える。



V 手研耳命(タギシミミノミコト)の乱と後継天皇

- 神武の死後、破廉恥な事件が起きている。
 - 神武の九州時代に生まれた息子の手研耳命が、神武の皇后であった伊須気余理比売を強引に娶り、政権を奪取した。
 - その後、伊須気余理比売と神武の間に生まれた子が、手研耳命を殺して、二代目の天皇となっている。
-
- ```

graph TD
 A[阿比良比賣] --- B[神武天皇]
 B --- C[伊須気余理比売]
 B --- D[手研耳命]
 B --- E[岐須美美命]
 C --- F[日子八井命]
 C --- G[神八井命]
 C --- H[神沼河命]

```
- この乱が、その後の社会や記紀の記述にも、与えた影響は大きかったものと推定する。
    - 手研耳命の乱に加担した人々は誰で有ったろうか。
      - 熊野灘の遭難を超えて、大和を勝ち取った九州から同行してきた人々は、どちらの側に付いたのだろうか？
      - 共に戦ってきたメンバーの絆は固いものだったと考え、九州から同行した人々が手研耳命の側に付いたとする推定する。
      - 手研耳命の乱が収束する時には、主要なメンバーは、抹殺されたのではないかと懸念する。
  - 九州から来た天孫族の一族の多くが抹殺されたはず。
    - 初代神武の皇后は事代主の娘、二代綏靖天皇の皇后も事代主の娘、三代の安寧天皇の皇后も事代主の孫娘。
    - 事代主の権勢の大きさが覗われる。
  - この結果、天皇家には、九州時代からの天孫族の風習・伝統行事を伝える人も居なくなつたと考える。
    - 又、伝承を伝えるも失われ、過去を伝える記述が不正確になったのではと、危惧する。
    - 天孫系の世代の少なさや、神武東征の出発からのルートの不正確な記述なども、ここに原因があるのかも知れない。



## VI. まとめと展望

- 戦後75年たった現在の古代史への問題提起を行った。
- 「歴史として読むこと」は、時間軸と空間を整理し、物語の内容を把握、考古資料などに対応関係をする事。科学的な情報も、大きな支援となる。
- 天岩戸事件から、一連の神話・物語を「歴史として読み直す」と、従来の理解とは異なる順序で事件が発生したことが判明した。
  - 天岩戸事件→出雲神話→天孫降臨→出雲国譲り→神武東征
- この順序で記紀神話を読み直し、「神話」が「歴史」となった一つの例を示した。
  - 神話が、「史実でない」とした証拠が、逆に史実であることの例。
  - 考古学上、提起された課題が、記紀神話によって解決される例。
  - 単なる神話として読み飛ばされてきた事実が、歴史上、重要な意味を持つことが理解できる例。
    - 政略結婚＝神武天皇と事代主の娘の結婚
      - » 出雲系の事代主の歴史的な重みが増大
    - 手研耳命の乱の処理で九州から来た勢力が排除
      - » 出雲系の躍進
      - » 天孫族の九州時代の伝説の曖昧さの主要因では
- 「歴史として読む」ことにより、神話が事実であったとなると、出雲神話等にある出雲族の動向が気になる。これが事実で、歴史として語れるとなると、さらに興味深い歴史となる**展望**が生まれる。
  - 大国主命の国造り＝出雲国の広がりと産業
  - 神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡で発見された大量の銅鐸と銅剣・銅矛
  - 勾玉・管玉の産地と流通ルート
  - これらに関わる姫たちの物語
  - 戦争遺跡
- 日本古代史は、一気に面白い物語性を持った歴史となると期待される。